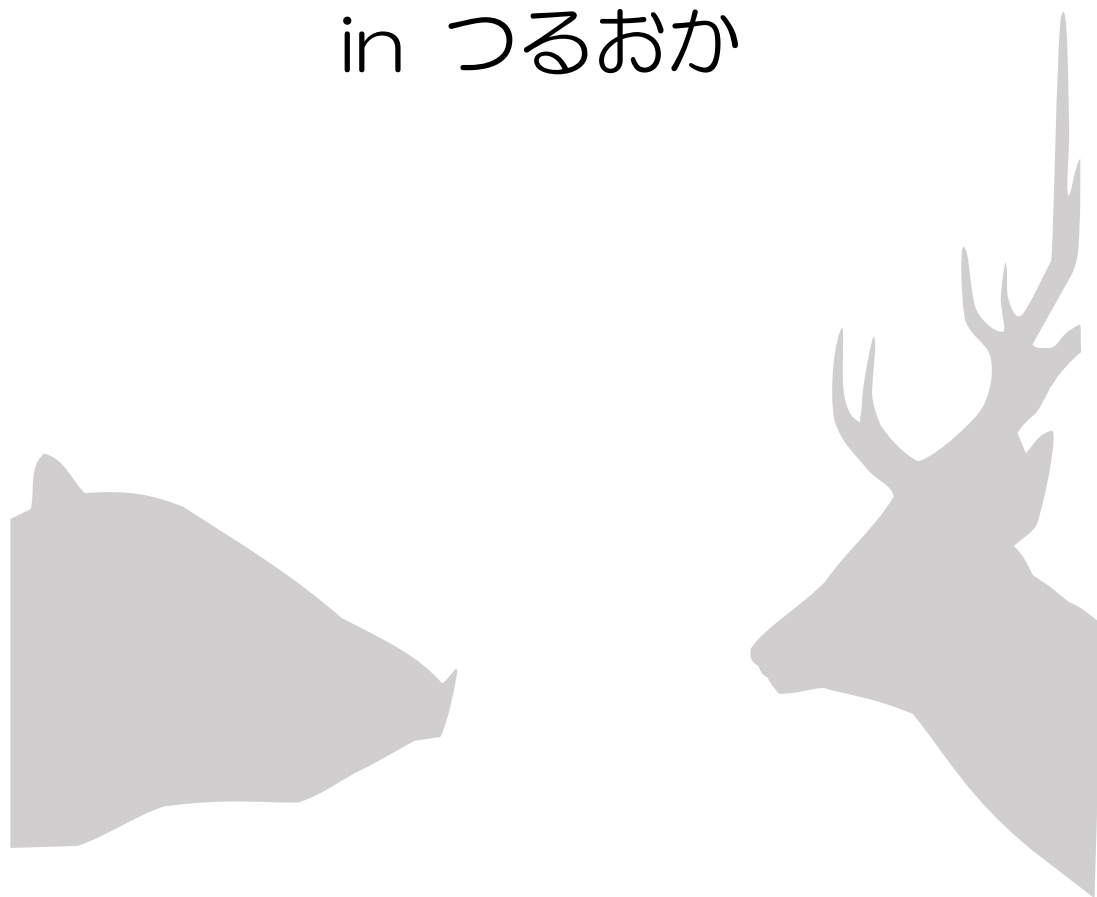


第4回

東北野生動物管理研究交流会

in つるおか



2017年11月11日（土曜日）

山形大学農学部 講演会場： 301 講義室

ポスター会場：201・202 講義室

懇親会会場： 農学部食堂

【実施体制】

主催：東北野生動物管理研究交流会実行委員会

(同)東北野生動物保護管理センター

共催：鶴岡市

後援：山形県

「野生生物と社会」学会

タイムスケジュール

【会場：301 講義室】

10：30～10：35 開会挨拶

10：35～10：40 趣旨説明

10：40～12：10

リレートーク PART I

- ① イノシシの分布回復と捕獲手法による諸問題
宇野 壮春 東北野生動物保護管理センター
- ② 原発事故・津波被災に伴う人間の移出が野生哺乳類群集に与える影響
奥田 圭 東京農工大学
- ③ 山形県でクマが目撃される場所にはどんな特徴があるか？
斎藤 昌幸 山形大学

12：10～12：45 昼食・休憩 ※この間にポスター展示可能です

※講義室内での飲食は可能です。ただしゴミはお持ち帰りください

【会場：201・202 講義室】

12：45～15：00 ポスター発表

コアタイム 12:45 ～ 13:30 発表番号（偶数）

13:30 ～ 14:15 発表番号（奇数）

【会場：301 講義室】

15：15～16：25 基調講演 無居住化がもたらす景観と生態系の変化

深澤 圭太 国立環境研究所

16：30～17：30 リレートーク PART II

- ④ 山形県におけるシカを目撃情報と生息実態
古澤 優佳 山形県森林研究研修センター
- ⑤ 音を使った新たなシカのモニタリングの試み
江成 広斗 山形大学

17：30～17：40 総括・閉会の挨拶

【会場：農学部会館 食堂】

18：30～20：30 懇親会

講演要旨

リレートーク

①イノシシの分布回復と捕獲手法による諸問題

宇野 壮春 東北野生動物保護管理センター

東北地方に分布域を拡大(回復)させるイノシシは、馴染みのない動物であるが故に行政や地域住民を戸惑わせ、各地で知識普及のために様々な勉強会や研修会が実施されている。密度が高くなれば甚大な農作物被害を引き起こすイノシシをどのように管理するのか?この問の答えを模索している地域が多い。特にイノシシは増加率が高いので、初期段階での対応が重要になるし、さらには長期的なビジョンも必要となる。その管理手法として一般的なものは、「捕獲」による密度抑制、「防除」による被害防止の二つである。ただ、イノシシの「捕獲」による管理は技術習得と人員確保が重要である一方、檻捕獲は東北地方に生息するツキノワグマの錯誤捕獲や餌付けという側面も含んでいる。また、「防除」の観点は積雪地でのメンテナンスと長期的な管理、大規模防護柵は地域の財産という認識が、人口減少社会の著しい東北にどのようにマッチさせていくかという問題もある。本発表ではこれらがもたらす諸問題について、考えてみたい。

②原発事故・津波被災に伴う人間の移出が野生哺乳類群集に与える影響

奥田 圭 東京農工大学

人口減少が加速度的に進む東北地方において、シカ・イノシシの分布回復の波が押し寄せてきている。野生動物管理の担い手が枯渇している中で、この波を如何に効率的に、省力的に、経済的に緩和させるのが今私たちに課せられた課題である。発表者らのグループでは、原発事故・津波被害によって人間生活が規制された地域において、人間活動の低下に伴う土地利用の変化等が、野生哺乳類の種組成や行動特性、食性に与える影響について研究を行っている。人間の移出 \approx 人口減少は野生哺乳類にどのような影響をもたらすのだろうか?本発表を通じ、人口減少社会における野生動物管理への挑戦の一助となる情報を提供できればと思う。

③山形県でクマが目撃される場所にはどんな特徴があるか？

斎藤 昌幸 山形大学

野生動物の目撃情報は分布の把握などさまざまな目的に利用されているが、ツキノワグマ（以下、クマ）の目撃情報はしばしば被害リスク管理に用いられる。クマが多く目撃されるということは、そこで人的被害が生じる可能性が高いと捉えることができるからである。山形県ではクマの目撃情報を収集しており、近年では Google map 上でその位置を公開している。この位置情報を活用することで、クマによる潜在的な人的被害リスクが高い地域を推定できる可能性がある。ただし、目撃情報は市民からの通報などに依存している部分も大きいことから、情報の量や空間分布などに何らかのバイアス（例えば地域差）があるかもしれない。本発表では、山形県においてクマが目撃された地点にはどのような特徴があるのか解析した事例について紹介する。具体的には、2017年の目撃地点を森林からの距離、集落からの距離、河川からの距離などの環境要因と市町村などの地域の違いで説明する統計モデルを構築した。この解析結果に基づき、どのような環境でクマの目撃情報が多いのか、そして目撃情報には地域差が存在しているのかどうかを議論したい。演者はクマの目撃情報を活用した解析を始めたばかりなので、会場の方々からぜひご意見をいただき、今後のさらなる分析につなげたい。

④山形県におけるシカの目撃情報と生息実態

古澤 優佳 山形県森林研究研修センター

近年、東北地方日本海側でもシカの目撃が相次いでおり、山形県も例外ではない。県では、侵入初期のシカの動態を把握することを目的に、目撃情報の収集とモニタリングを行ってきた。今回は、2009年から2017年10月までの目撃情報について、その変遷と現状を整理した。その結果、目撃件数は2012年の調査開始から緩やかに増加しており、秋季にオスの目撃が多いのが特徴であった。最初の情報から9年が経過しているが、現時点では大きな変化がないため、生息初期の状態と推測された。目撃位置を整理すると、一定地域の中で継続して複数回の目撃がある場所が幾つか存在することが確認された。一方で、自動撮影カメラによるモニタリングを別途行ってきたが、低密度地域では課題が多い。コスト、労力、調査範囲、調査技術などの面から、より効率的なモニタリング手法が望まれているため、音声を使用した手法の検討を2016年から始めている。今後は、目撃頻度の高い場所を中心に、定点のモニタリングサイトを設置し、個体の増減や動態を、より効率的に把握していく必要があると考えられる。

⑤音を使った新たなシカのモニタリングの試み

江成 広斗 山形大学

東北地方の太平洋側から日本海側にかけて、ニホンシカ（以下シカ）の分布は着実に広がりがつつある。生息不適地とこれまで考えられてきた豪雪地の多い日本海側において、シカがどのような個体群動態を示し、そしてどのような生態系へのインパクトをもたらすかは不明である。しかし、これまで日本各地で経験してきたシカ問題対応における過去の失敗を鑑みると、被害顕在化前の予防的対応の重要性は明らかである。

予防的対応のためには、シカの分布拡大（正確には回復）を予測し、どのような地域でどのようなリスクが生じうるのかを評価する必要がある。こうしたリスク評価の精度を向上させるためには、継続的なシカのモニタリングは不可欠であるが、従来の手法（たとえば、カメラトラップ、スポットライトカウントなど）では分布開始初期のシカを効率的に発見できず、コスト面からも継続的なモニタリングには不向きである可能性がある。そこで演者らは、オスシカの発する鳴き声（咆哮）に注目して、2つの新たなモニタリング手法（PAM法とAAM法）を開発した。本発表では、この手法の有効性と今後の展望について紹介したい。

基調講演 無居住化がもたらす景観と生態系の変化

深澤 圭太 国立環境研究所 主任研究員

日本は人口減少時代に入り、2100年には総人口が現在の約半分になることが予測されている。このような急激な人口減少は過去に例がなく、広域で無居住化や耕作停止が進むことにより日本の景観や生態系は大きな変化に直面することになると考えられる。また、原発事故後に設定された広大な避難指示区域においては、すでに野生鳥獣の個体群の急速な変化が周辺や避難指示解除後の住民の生活にとっての障害となっている。本講演においては、全国各地の長期無居住化集落や避難指示区域内外における景観と生態系の変化について、現地での比較研究の結果を交えながら論じる。無居住化後の景観の変化は多様であり、同様の年数を経てもススキが優占する草地や高木林が成立していた場合があり、状況依存性が高かった。また、一部にモウソウチクが繁茂していたケースもあった。生物相の変化については草地性や都市性の種の欠落、イノシシなどの大型鳥獣の高密度化が確認された。これらの変化のうちいくつかは、周辺の居住集落にも影響が波及する可能性があるため、限られた労力でそれを防ぐための空間的な戦略が必要であると考えられる。

- P-1 人口減少を踏まえた野生動物管理の展望 ～東北の「今」からみえてきた問題の実態～
○江成広斗（山形大学）
- P-2 箱わなでイノシシを捕る～捕獲効率向上のための工夫～
○丸山哲也¹・神林拓也²・中野美智雄³・小寺祐二⁴
（1 栃木県林業センター・2 ツインリンクもてぎ・3 鳥獣管理士・4:宇都宮大学）
- P-3 電気さくを活用した早期・長期防御の有効性
○菊池恭則・滝沢勲（サージ ミヤワキ株）
- P-4 天狗森（月山山麓）の野生動物
○長南厚（出羽三山の自然を守る会）
- P-5 スマートフォンアプリを活用したロードキル対策
○可児里砂（株式会社インターリスク総研）
- P-6 ロードキル記録の解析からみる都市周辺での野生動物に由来する軋轢発生の変化
○神宮翔真¹・武正憲²・佐方啓介³・伊藤太一³（1 筑波大学大学院生命環境科学研究科国際地縁技術開発科学専攻・2 筑波大芸術系・3 筑波大学生命環境系）
- P-7 積雪地におけるイノシシの食性
○嶋本拓真¹・鯉沼遥¹・望月翔太¹・丸山凌平²・山本麻希²
（1 新潟大学大学院自然科学研究科・2 長岡技術科学大学生物機能工学）
- P-8 適切な野生動物管理に向けたアンケート調査による地域要望の整理
○千葉 翔・古澤優佳・益田明佳・齊藤正一（山形県森林研究研修センター）
- P-9 市街地に出没するニホンジカの生態 ―釜石市のGPS 首輪データから
○木野田拓也（合同会社東北野生動物保護管理センター）
- P-10 ニホンザルの行動圏算出法の比較および検討
○浅井隆之（東北野生動物保護管理センター）
- P-11 多雪地域における中型哺乳類の糞に飛来する糞虫相の評価―哺乳類種間と森林タイプによる比較―
○豊川春香¹・齊藤麻璃惟²・江成広斗^{1,2}（1 山形大学大学院農学研究科・2 山形大学農学部）
- P-12 広域を対象としたニホンジカ生息密度分布の解析
○近藤洋史¹・小泉透²（1（国研）森林機構森林総合研究所九州支所・2（国研）森林機構森林総合研究所多摩森林科学園）
- P-13 状態空間モデルを用いた新潟県に生息するツキノワグマの個体数推定
○市川麻衣¹・望月翔太¹・山本麻希²・村上拓彦³
（1 新潟大学大学院自然科学研究科・2 長岡技術科学大学生物系・3 新潟大学農学部）
- P-14 上名川演習林における中・大型哺乳類の種子散布 ～散布地点の環境と季節変化～
○齊藤麻璃惟¹・江成広斗¹（1 山形大学農学部）

P-15 ホンシュウジカとシカ属外来種の野外交雑—大阪府での事例

松本悠貴¹・高木俊人²・幸田良介³・玉手英利²

(1 総研大 遺伝研・2 山形大 理・3 大阪環農水研)

P-16 地域住民と野生動物の多様なかかわりの中における獣害—岩手県盛岡市I地区を事例として

○太刀川晴之¹・山本信次² (1 岩手大学総合科学研究科・2 岩手大学農学部)

P-17 ツミの遺伝的構造と遺伝的多様性

○長井和哉¹・Sontaya Manawatthana²・Philip D. Round²・樋口広芳³

(1 岩手大学農学部・2 Mahidol University・3 慶應大学自然科学研究教育センター)

P-18 ドローンを用いたイヌワシ調査事例—巢へのアプローチと巢内残滓採取方法の検討—

○長船裕紀 (庄内海岸いきもの調査グループ)

P-19 ニホンザル加害群における資源選択性の時間的变化

○上田羊介¹・望月翔太¹・山本圭介²・村上拓彦³

(1 新潟大院 自然科学・2 NPO 法人 甲斐けもの社中・3 新潟大 農)

P-20 山形県米沢市広域自動撮影カメラ調査における動物の出現数

○小城伸晃¹・高木俊人²・佐々木理人²・中村夢奈¹

(1 Wildlife Partnership Office やまがたヤマネ研究会・2 山形大学理学部生物学科)

P-21 環境雑音が及ぼすニホンジカの受動的音声モニタリングへの影響

○加藤亜沙美・江成広斗 (山形大学農学部)

P-22 福島県富岡町における哺乳類の生息状況について —2014年から2017年にかけてのセンサーカメラ調査結果報告—

○鬼久保浩正¹・板谷浩男¹ (1 浜通り生物研究会 DREAM24)

P-23 福島県富岡町における鳥類モニタリング

○板谷浩男¹・鬼久保浩正¹・木本祥太² (1 浜通り生物研究会・2 日本野鳥の会石川)

P-24 福島県鳥獣被害対策市町村リーダー育成モデル事業の取組

○藤田剛輝 (福島県農林水産部環境保全農業課)

P-25 ICT 捕獲支援システム「オリワナ通信」を導入した地域の導入効果と捕獲従事者の負担評価—宮城県仙台市の事例—

○相澤あゆみ¹・藤本晶史²

(1 株式会社渡辺サービスセンター・2 株式会社フォレストシー)

P-26 名城大学 野生動物生態研究会 活動紹介

○西村祐輝¹・林航平² (1 名城大学 農・2 名城大学 農 OB)

P-27 神奈川県松田町におけるイノシシ、シカ被害対策及び捕獲の推進事例

○小野晋・唐橋あかり・遠藤友彦・宮畑貴之 (株式会社 地域環境計画)

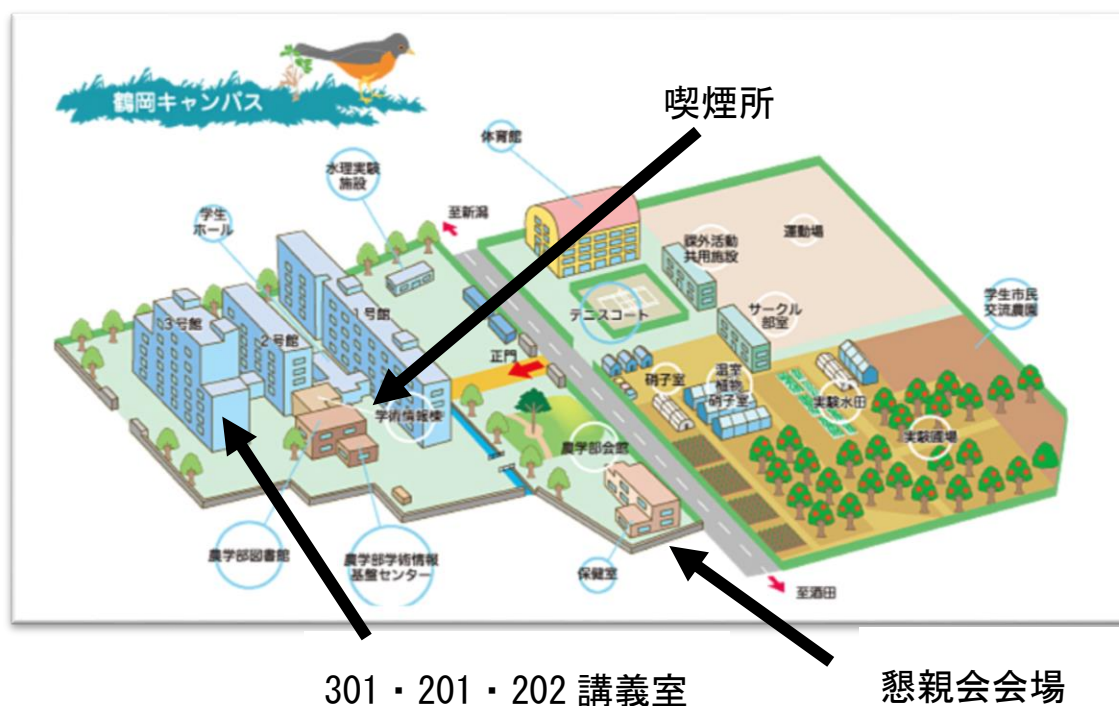
P-28 ブナ堅果の豊凶が哺乳類各種の生息地利用に与える影響

○江成はるか¹・江成広斗² (1 雪国野生動物研究会・2 山形大学)

注意事項

- 大学構内は喫煙所を除き「禁煙」となっています。喫煙所は1号館と2号館の間にあるプレハブのスペースにてお願いいたします。
- 構内にはゴミ箱はありません。ゴミはお持ち帰りください。
- 講演やポスターの写真撮影やビデオ撮影はご遠慮ください。

キャンパスマップ



【 研究交流会実行委員名簿 】

山形大学：玉手英利・林田光祐・江成広斗・斎藤昌幸

山形県森林研究研修センター：齊藤正一

(同)東北野生動物保護管理センター：宇野壮春、関健太郎

東京農工大学：奥田圭

雪国野生動物研究会（事務局）：江成はるか